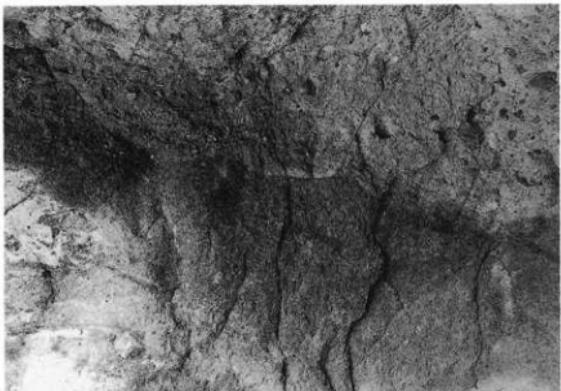


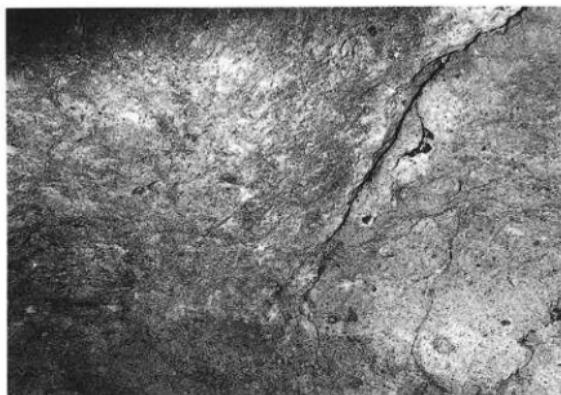
13号横穴墓 玄室 右側壁



14号横穴墓 調査前



14号横穴墓 玄室 左側壁





14号横穴墓 玄室 右側壁



11-1

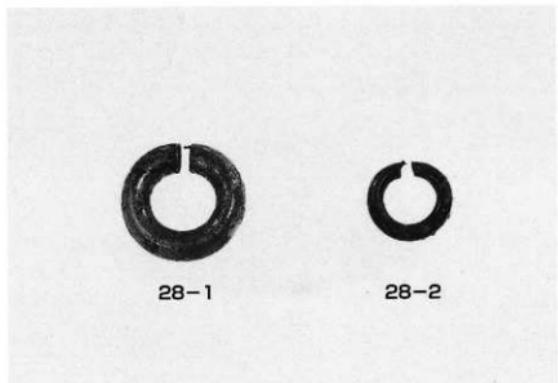
1号横穴墓 前庭外出土遺物
須恵器 大口縁部



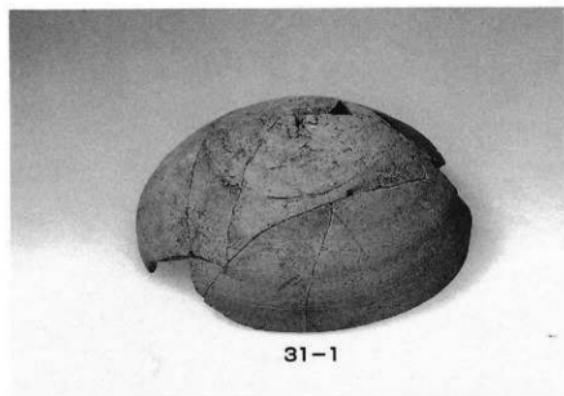
11-2

須恵器 大型

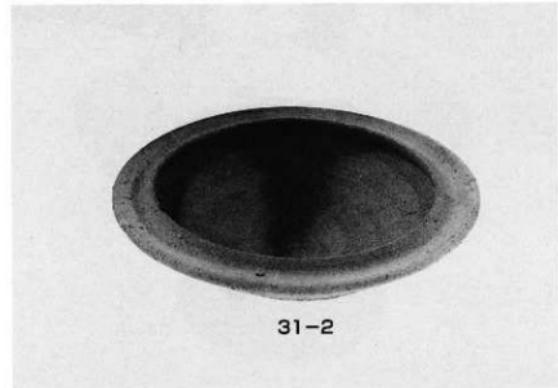
8号横穴墓 出土遗物
金环



9号横穴墓 出土遗物
須惠器坏蓋



須惠器 壺身





31-3

須惠器 壺蓋



31-4

須惠器 壺身



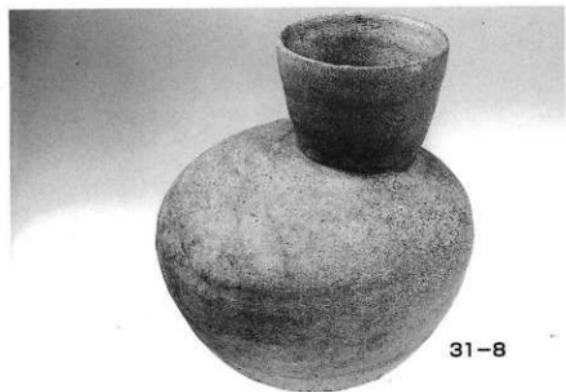
31-6

須惠器 高壺



須惠器 高台付环身

31-7



須惠器 平瓶

31-8



鐵鎌

31-9



44

13号横穴墓 出土遺物
土師質土器 壺身 高台部



47-1

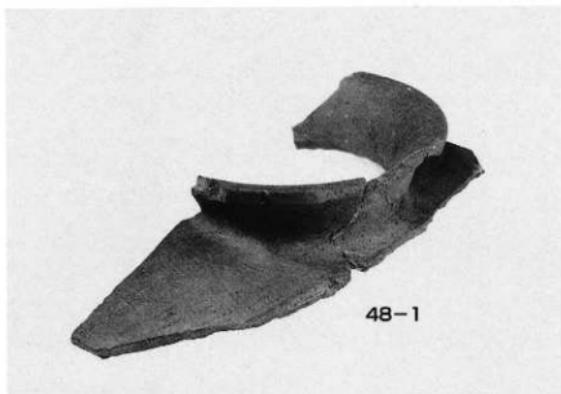
14号横穴墓 出土遺物
須恵器 高壠 脚部



47-2

土師質土器 壺底部

遺構外 出土遺物
須惠器 大甕 口緣部



48-1

須惠器 高坏



48-2

2. 谷部の調査

(谷1区) 調査の概要

谷1区は、上塙治横穴墓群第17支群の築造された斜面下の谷部で行った調査の内、谷の最奥部に設定した調査区である。調査は、表土を地表下約30cmまで重機で掘削した後、その下層を手掘りによって行った。

土層の堆積は、調査区最上部で表土下30cm程度ほどの堆積しかないのに対して、傾斜の緩くなる下方では、2m近く堆積している。また、調査区下方の一部では、表土直下30cmほどの土石流によるものと考えられる岩盤崩落層が存在し、これと類似した土層の堆積は後述の谷2区においても確認されている。

遺構は調査区下部で落ち込み状遺構1基(SK01)、調査区全域でピットが合計200基以上検出された。ピットは深さ10cm程度のものが多く、当初の遺構面は流れている可能性も考えられる。

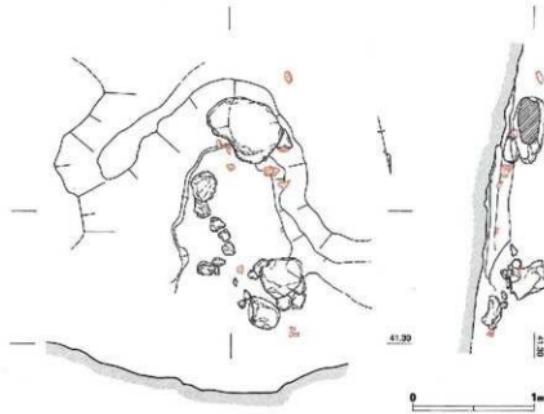
遺物は極めて少量であるが、包含層中からは須恵器片・陶磁器片が確認されている。遺構に伴う遺物は、SK01で須恵器短頸壺が確認されたのみである。

SK01 (第51図)

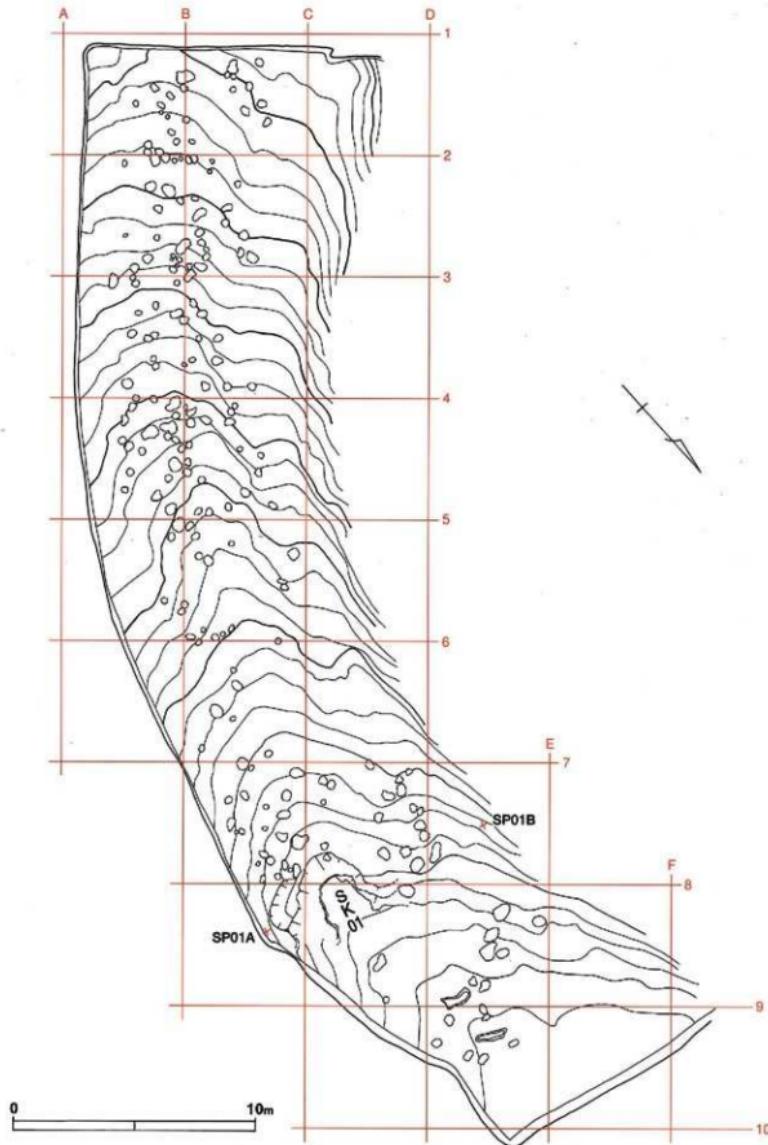
SK01は調査区の下方、地形の傾斜が緩やかになるあたりに掘り込まれた性格不明の皿状の落ち込みである。調査時に確認した形状では、斜面の下方、東側に向けて広がるいびつなU字形をした段状の落ち込みで、南北長約1.8m、東西幅約1.4~2m、深さ30cmを測る。落ち込みの最下部約5cmでは更に南北長約1.1m、東西幅約0.9~1.1mがU字形に落ち込んでいた。セクションの状況等から本来の形状を推定復元する

と、南北長2.2m前
後、東西幅1.2m前
後、深さ約30cmの楕
円形状の落ち込み
で、最下部約5cmに
南北長約1.1m、東
西幅0.9m前後の楕
円形状の段が掘り込
まれていたものと推
定される。

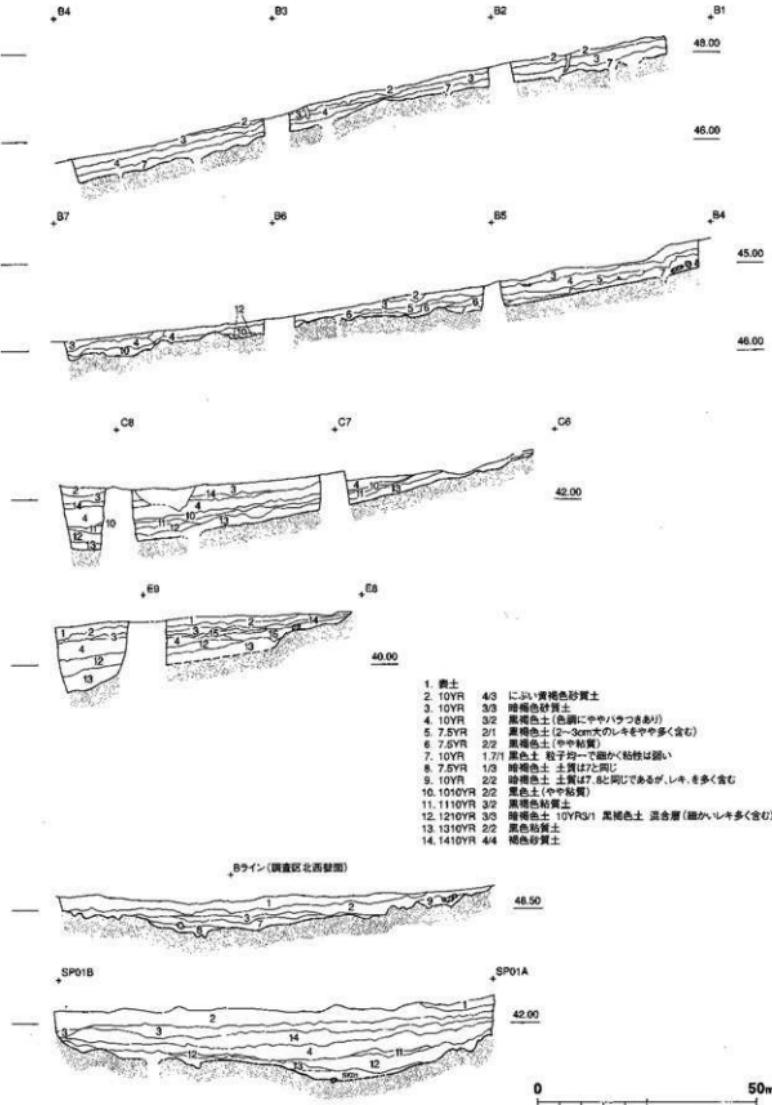
また、遺構上面で
は大小の自然石が
固まって検出されて
おり、石の大きさは
大きいもので50cm



第51図 SK01遺構実測図



第52図 谷1区 遺構配置図



第53図 谷1区 土層断面図

大、小さいもので10cm大で、その大部分は原位置をとどめていないものと思われるが、落ち込みの西側端付近の石2つは、原位置の可能性がある。

遺物は、落ち込みの上層、石の下から完形に近い須恵器短頸壺が破碎した状態で出土している。

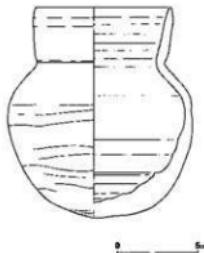
S K01出土遺物（第54図）

第54図はSK01から出土した須恵器短頸壺である。口径7.4cm、体部最大径11.4cm、器高13.2cmを測る。口縁部は直立する単純な筒状を呈する。全体に内外面ともナデ調整により仕上げられているが、肩部以下外面は荒いナデで、底部付近にはナデ調整前にケズりが施されていた痕跡が認められる。大谷編年5期前後に平行するものであろうか。実年代としては6世紀末～7世紀初め頃が与えられよう。

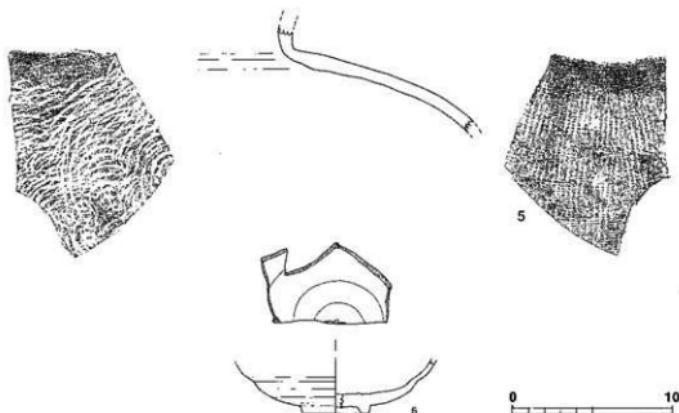
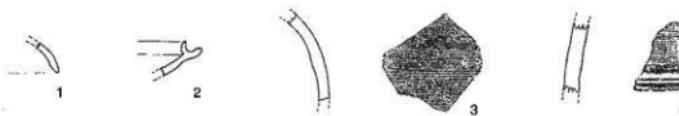
ピット

谷奥部とSK01周辺部を中心に円形・楕円形状を呈するピットが大小200以上検出された。

谷奥部のピットは直径20～30cmのものが大半であるが、深さは10cm程度のものが多い。直径の割りに浅く、当初の遺構面は流れている可能性も考えられる。SK01周辺のピットは直径40～50cmで、深



第54図 SK01 出土遺物



第55図 谷1区 遺構外遺物

さ20~30cm程度のものが多い。これらのピット群は柱穴の可能性が考えられるが、建物等としての並び、組み合いは確認できなかった。

遺構外遺物（第55図）

第55図は包含層出土遺物である。全体に出土量は少ない。出土遺物のはほとんどは須恵器であったが、陶磁器も混在していた。須恵器はほとんどの層位で確認されたが、陶磁器の出土した層は3層以下であった。

1~5は須恵器である。1は壺蓋の口縁端部で、厚みが均一で内湾し、端部を丸く仕上げている。2は壺身の受部で、やや短めの外反する立ち上がりを持つ。端部は単純に仕上げている。3は壺類の体部と推定されるもので、外面にカキメ調整が確認される。4は壺口縁部で、緩やかな波状文の下に3本の沈線が確認される。5は壺頸部から肩部にかけての破片で、退部外面には平行タタキ痕が、内面には同心円タタキ痕が残る。

6は陶器の皿である。口縁が外反した後、さらに内湾する。外反する部分では内面に段がつく。高台は端部に広い面を持つ。乳白色の釉がかかり、見込み蛇の目釉調ぎで、底部周辺無釉である。

1, 2の須恵器は大谷編年5~6期頃のものと考えられる。6の陶器は近世頃のものであろう。

小 結

谷1区の調査では柱穴と思われる遺構を多数検出したが、組み合い等が確認できなかったため、建物施設の詳細は不明である。

SK01及び包含層より出土した土器から推定される遺構の時期は、横穴墓の造墓時期とほぼ同時期で、極めて短期間に造営されたものようである。横穴墓の造墓に係わる一時的な施設等である可能性も考えられよう。

(谷2区) 調査の概要

谷2区は、谷1区の北東、谷の出口付近に設定した調査区である。調査は、表土を地表下20~30cmまで重機で掘削した後、その下層を手掘りによって行った。

土層の堆積は、谷の最深部で2.5m以上の堆積が見られたが、調査区が崩壊する恐れが生じたため、地山の確認は1~4グリッドの途中まで断念した。2・3・9~11・13・14・16・17層及びA、B層は近世以降の堆積土、それより下層は少なくとも8B層以上が古墳時代後期~終末期以降の堆積土である。A、B層、A'、B'層は土石流の堆積層と推定される。

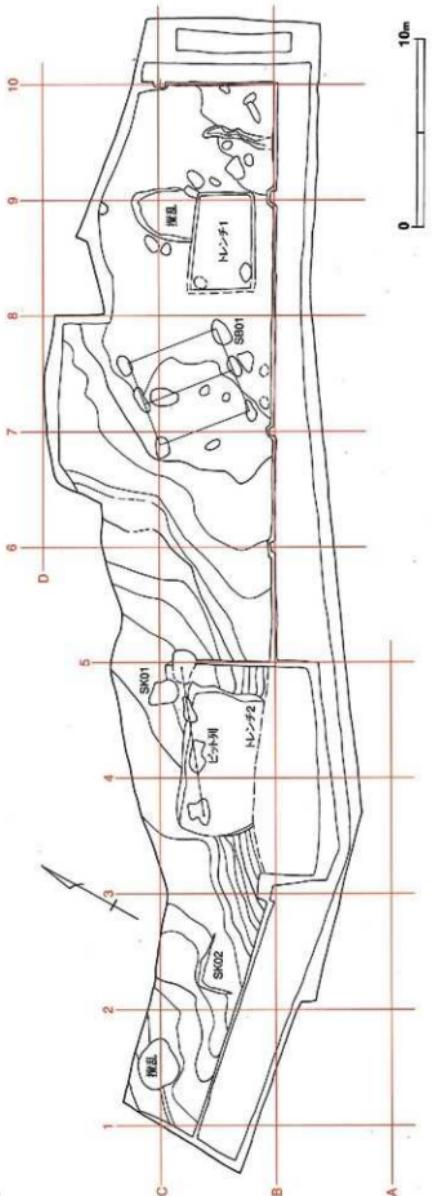
遺構は落ち込み状遺構2基、ピット列1基、溝状遺構1基、堀立柱建物跡1基、ピット状遺構22基が検出された。

遺物はSK01、ピット内より陶磁器片が、包含層より陶磁器片、瓦質土器片、須恵器片、キセル雁首、土師器片が出土している。遺物の時期は古墳時代終末期前後と近世頃の二時期がある。

S B 0 1 (第58図)

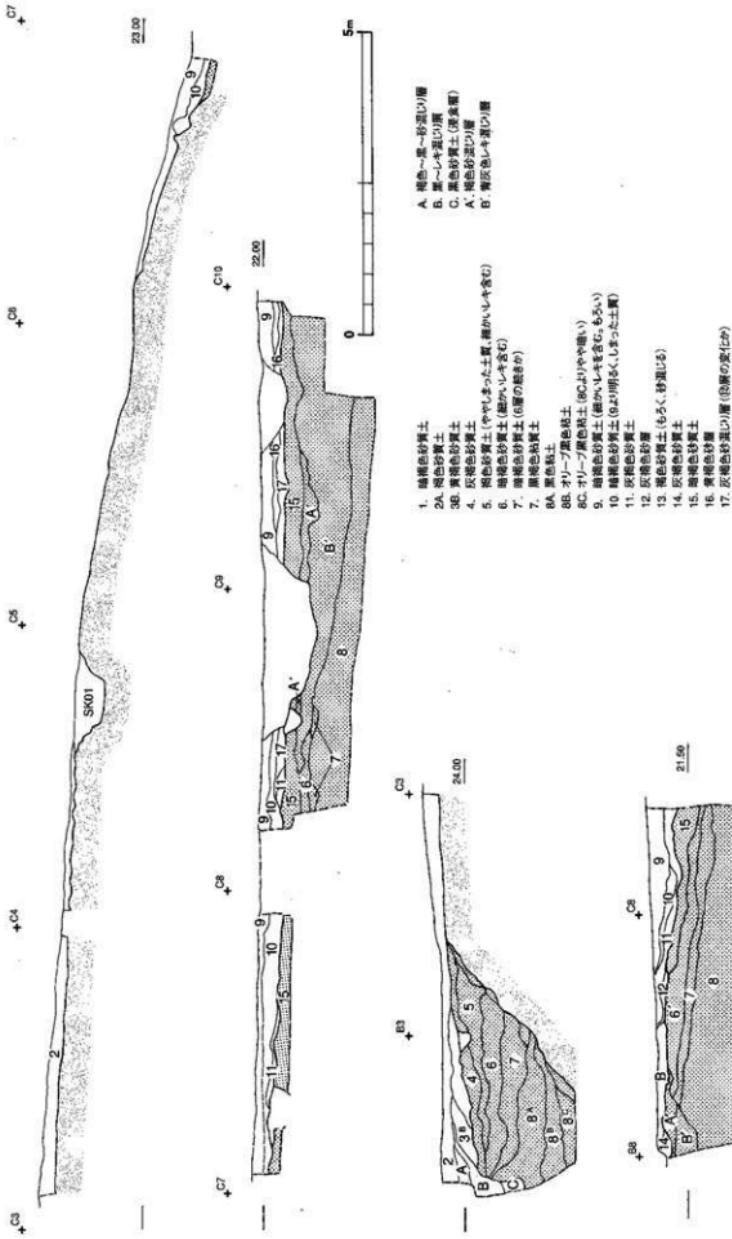
SB01は谷の出口付近、7グリッドで検出された南東~北西方向1間、南西~北東方向2間の堀立柱建物跡である。

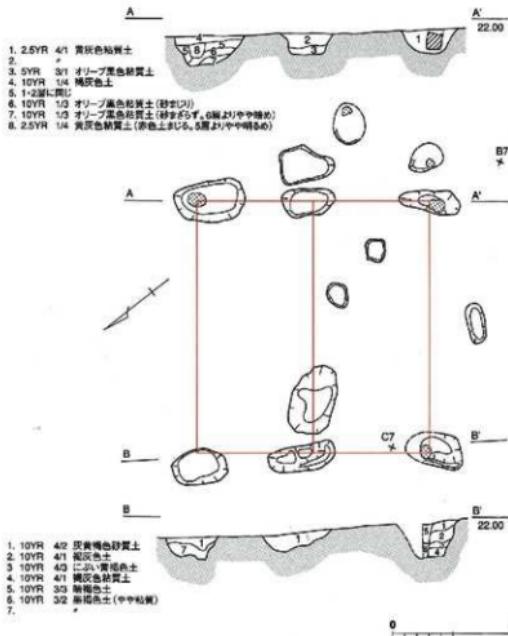
正方形に近い平面形だが、4.2m×3.8mと南東~北西方向がわずかに長い。南西~北東方向の柱間は1.9m~1.95mを測る。柱穴は長兄m前後の楕円形状で、深さ30cm~60cmを測る。柱穴から



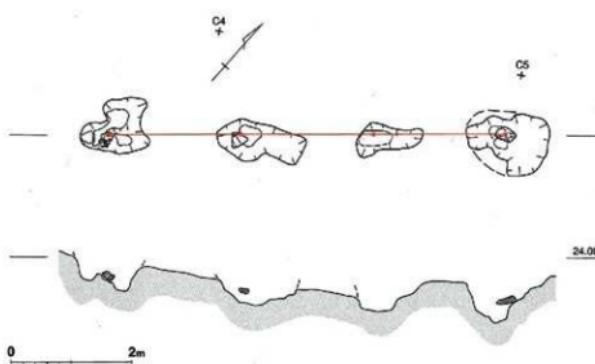
第56図 谷2区 遺構配置図

第57図 谷2区 土層断面図





第58図 SB01遺構実測図



第59図 ピット列 遺構実測図

は、1ヶ所柱根が残っていたほか、2ヶ所で土層による柱跡の確認ができた。柱は太さ20cm～30cmの丸材であったと考えられるが、表面の加工等までは確認できなかった。

遺物は柱根の確認された柱穴より磁器小片1点(第62図-8)が出土している。伊万里系の磁器で外面に流水の一種かと思われる染め付け文様が見られる。

ピット列1(第59図)

ピット列1はB3～4グリッド、谷斜面裾付近にある地形の平坦面に掘り込まれた、4基のピットからなるピット列である。試掘時に掘りすぎがあったため、本来の遺構面からは少し掘り下がった状態で検出した。

ピット本来の大きさは長径1.4m前後、深さ70cm程度の楕円形状の平面形を呈するものであったと推測される。ピット内には1つを除いて、根石かと思われる20～35cm大の石が確認された。根石から根石までの距離は約2.2mとほぼ等間隔で、南西～北東方向に直線で並ぶ。

遺物等は全く確認されていない。

SK01(第60図)

SK01は4グリッドの北寄り、地形の平坦面に掘り込まれた落ち込み状遺構である。遺構本来の平面形はサブトレンチで破壊してしまったため土層からの復元と

なるが、径約1.4m、深さ40cm程度の落ち込みであったと推定される。埋土中には炭が多く混入していた。

遺物は埋土中より陶磁器片数点（第62図）が出土した。

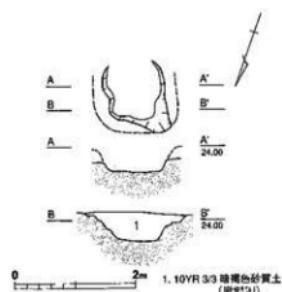
1～3は陶胎染め付けの碗である。1と2は同一個体の可能性が強いもので、高台付近に1本、口縁付近に2本の線と体部に不明絵柄が染め付けられている。3は高台付近に2本線の染め付けが確認される。4～5は磁器である。いずれも白磁皿で、5には内面に2重線格子の緋色の染め付けが、6には絵柄不明の茶色の染め付けが確認される。7は焰烙の口縁部分の破片である。

遺物の磁器は18世紀後半前後と考えられる。

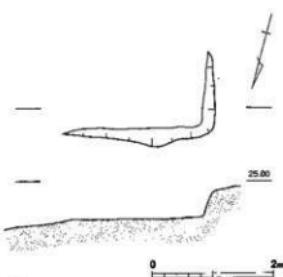
SK02 (第61図)

SK02は調査区の西端付近、2グリッドに掘り込まれたL字状の落ち込みである。南北1.4m、東西2.5m、深さ約50cmの落ち込みで、底部は明瞭な平坦面となっている。本来方形もしくは長方形形状の落ち込みであった可能性もあるが、検出プランや土層ではそういう状況は確認できなかった。

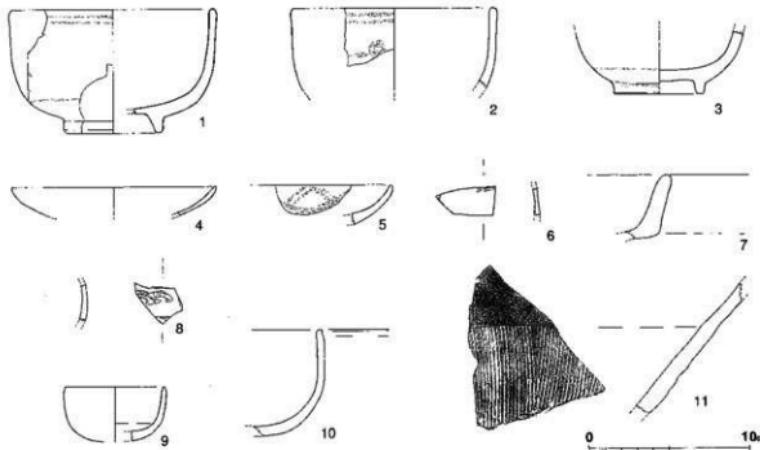
遺物等は全く確認されていない。



第60図 SK01 遺構実測図



第61図 SK02 遺構実測図



第62図 遺構内遺物実測図 (1~7 SK01, 8 SB01, 9~11 P31)

その他ピット群（第56図）

谷の出口付近では、径40cm大から1m大のものまで大小のピットが群集している。これらのピットの中には柱根が残るものもあり、建物等の跡と考えられるが、調査区の中ではSB01以外に建物として並ぶものは確認できなかった。

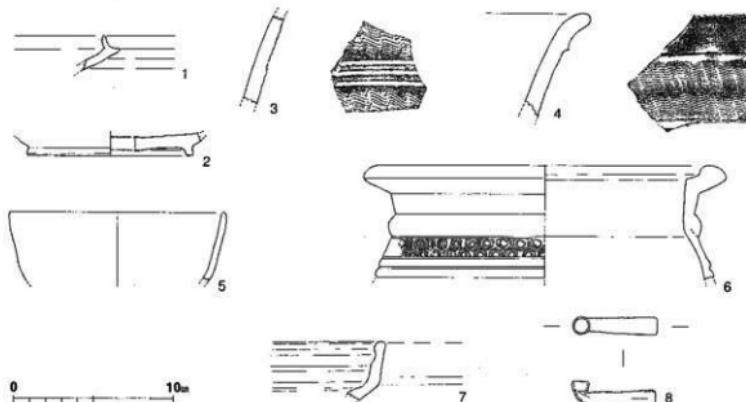
遺物はC8グリッドの北端のピットから陶磁器片（第62図）が若干確認されるのみである。出土遺物には白磁ぐいのみ（9）、陶器碗（10）、擂鉢（11）がある。

近世造構面上層出土遺物（第63図）

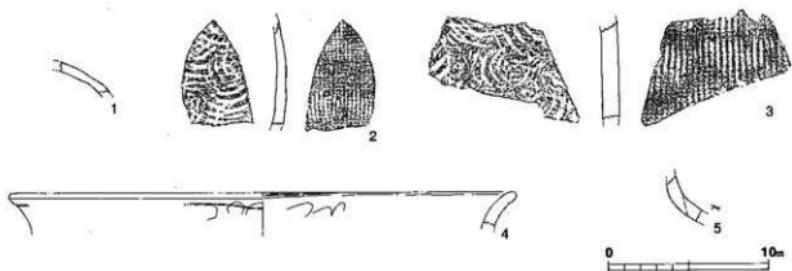
近世造構面以上の堆積土層より須恵器、陶磁器、煙管等が出土している。

1～4は須恵器である。1は壺身の受部片である。大谷編年3～4期に対応するものと考えられる。2は高台付きの皿もしくは壺の底部片である。焼きが悪く、風化著しいため調整等は不明である。奈良～平安期のものであろう。3・4は大壺口縁部の破片である。3は3本の沈線の上下に波状文が施されている。4は口縁付近に稜を持ち、端部はやや外反しながら丸く納める。稜と沈線の間に2段の波状文が施されている。5は陶器碗である。内外面に暗緑色の釉がかかる。6は瓦質土器甕である。口縁端は丸く納め、内面向かって肥厚する。頸部から体部にかけて3本の突帯が確認され、肩部には亀甲文が帶状に施されている。7は焙烙の口縁部片である。8は煙管の雁首である。吸口側から見て左側に銅板の継目が確認される。油返しの湾曲が無く、火皿へ直接続く。古泉編年第5段階に対応するもので、18世紀後半頃のものと考えられる。

須恵器は、調査区の北西側斜面に築かれている横穴墓から流れ込んできた遺物と考えられる。他の遺物については近世造構の時期に対応するものであろう。



第63図 谷2区 遺構外遺物実測図



第64図 遺構外遺物実測図

近世遺構面下層出土遺物（第64図）

近世遺構面以上の堆積土層より須恵器、土師器が出土している。これらはいずれも8AB層から出土したものである。

1～3は須恵器である。1は壺蓋の天井部片である。2・3は壺等の体部片である。内面に青海波文タタキ、外面に平行タタキが施される。4・5は土師器である。4は壺口縁部である。内外面ナデ・オサエで調整されるが、端部内面付近にはハケメが残る。5は壺等の頸部片である。

遺物の時期は小片のため不確定だが、およそ古墳時代後期から奈良～平安期の範疇に入るものと考えられる。横穴墓築造遺構の流れ込みであろう。

小 結

谷2区の調査では近世遺構面において建物跡に伴う柱穴を検出した。遺構の時期は、出土遺物より18世紀頃と推定される。また、横穴墓築造時の谷底の地形が現在より少なくとも2m以上は低かったことが堆積土中遺物より確認された。

横穴墓築造以降、自然堆積や土石流等によって谷が徐々に埋まり、土地が安定した時に近世の遺構が築かれたようである。その後再び流土、土石流による堆積によって調査時の地形が形成されたと考えられる。

註(1)大谷 真二 「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌』第10集 島根考古学会 1994年

(2)古泉 弘 『考古学ライブラリー48 江戸の考古学』ニューサイエンス社 1992年

*土石流の堆積については、現地で渡邉正巳氏に御教示いただいた。

谷1区出土土器観察表

掲図 番号	写真 図版	出土地点	種別 磁器	法量(cm)	手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
54-1	図版38	SK01	須恵器 壺	口径(8.3) 器高(13.1) 底径	外面:ナデ 内面:ナデ 内外面ケズリ後	密	良好	青灰色	
55-1	図版38	試掘トレンチ D4Gr周辺	須恵器 壺 口縁部	口径 器高 底径	外面:ナデ 内面:ナデ	密	良好	暗青灰色	
-2	*	表上	須恵器 壺身 口縁部	口径 器高 底径	外面:ナデ 内面:ナデ	密	良好	暗青灰色	大谷5期
-3	*	8~9Gr	須恵器 瓶 全体部	口径 器高 底径	外面:カキメ 内面:ナデ	密 1mm以下の 砂を若干含む	良好	暗青灰色	
-4	*	試掘トレンチ D4Gr周辺	須恵器 壺 L1縁部	口径 器高 底径	外面:沈線、波状紋 内面:ナデ	2mm大の 砂粒含む	良好	暗青灰色	
-5	*	試掘トレンチ D4Gr周辺	須恵器 大型 壺—一部	口径 器高 底径	外面:タタキ後カキメ 内面:タタキ(青海波紋)	2mm大の 砂粒含む	良好	外/淡灰色 内/青灰色	
-6	*	C6Gr 3層	陶器	口径 器高 底径(4.0)	外面:施釉、下部ケズリ 内面:施釉 底部糸切り	密	良好	施釉乳白色 (やや緑がかっている) 淡黄褐色	内面蛇ノ目釉剥

谷2区出土土器観察表

掲図 番号	写真 図版	出土地点	種別 磁器	法量(cm)	手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
62-1	図版43	B4Gr SK01	陶器 碗	口径(12.3) 器高 底径	外面:施釉 内面:施釉	密	良好	暗い緑色	陶胎染付 18c後半前後
-2	*	B4Gr SK01	陶器 碗	口径(12.3)	外面:施釉 内面:施釉	密	良好	暗い緑色	陶胎染付 18c後半前後 (上と同一窯の可能性)
-3	*	B4Gr SK01	陶器 碗	口径 器高 底径(5.3)	外面:施釉 内面:施釉	密	良好	暗い緑色	陶胎染付 18c後半前後
-4	*	B4Gr SK01	陶器 皿 L1縁部	口径(12.6) 器高 底径	外面:施釉 内面:施釉	密	良好	白色 (少し緑がかっている)	白磁

掲図番号	写真図版	出土地点	種別器	法量(cm)	手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
-5	図版43	B4Gr SK01	皿 口縁部 器高 底径	口径 内面：施釉 外縁部先端は釉なし	密	良好	白色 (少し緑がかっている)	内面に藍色で擦	の因柄 白磁
-6	*	B4Gr SK01	磁器 皿	口径 器高 底径	外面：施釉 内面：施釉 外面一部釉なし	密	良	白色 (外面は少し緑 がかっている)	内/こげ茶色 (一部がかっている)の剥 離柄不明 (4と同一個体?) 白磁
-7	*	C4Gr SK01	焙烙鍋	口径 器高 底径	外面：ナデ 内面：ナデ	1mm以下の 砂、雲母を 含む	良	赤褐色	
-8	*	B7Gr SB01	磁器 碗	口径 器高 底径	外面：施釉 内面：施釉	密	良好	白色	外/藍色で流水紋? 白磁
-9	*	C8Gr P31	磁器 ぐい呑み	口径(0.6) 器高(3.4) 底径	外面：施釉 内面：施釉	密	良好	白色	白磁
-10	*	C8Gr P31	陶器 碗	口径 器高 底径	外面：施釉 内面：施釉 外面底部釉なし	密	良好	暗褐色 (白色が混ざる) 断/暗灰色	
-11	*	C8Gr P31	陶器 擂鉢	口径 器高 底径	外面：ナデ 内面：施釉	密	良好	暗茶褐色 断/赤褐色	内/16本1単位 の条線
63-1	図版44	B7Gr 13層	須恵器 坏身	口径 器高 底径	外面：ナデ 内面：ナデ	密	良好	外/暗灰白色 内/灰白色	大谷3~4期
-2	*	B2Gr 3層	須恵器 皿	口径 器高 底径(10.1)	外面：不明 内面：不明	1mm程度の 砂、雲母を 含む	不良	乳白色	
-3	*	C7Gr 11層	須恵器 大甕	口径 器高 底径	外面：沈線、波状紋 内面：ナデ 3本の波線	密	やや 不良	暗青灰色 断/赤褐色	8本以上1単位の 波状紋 6本以上1単位の 波状紋 7C?
-4	*	13層	須恵器 大甕	口径 器高 底径	外面：沈線、波状紋 内面：ナデ 1本の波線	密	良好	青灰色 断/暗い淡黄褐色	11本1単位の 波状紋 10本1単位の 波状紋 7C?
-5	*	C8Gr 9層	陶器 碗	口径(13.2) 器高 底径	外面：施釉 内面：施釉	密	良好	暗い緑色	
-6	*	B5Gr 3層	瓦質土器 甕 口縁部	口径(20.7) 器高 底径	外面：ナデ 内面：ナデ 外面頸部亀甲紋	非常に密	良好	暗灰色	
-7	*	B6Gr 37層	焙烙鍋	口径 器高 底径	外面：ナデ 内面：ナデ	非常に密	良好	外/灰色 内/黒色 断/乳白色	

攝図番号	写真図版	出土地点	種別 磁器	法量(cm)	手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
64-1	図版44	B7Gr 8A層	須恵器 壺蓋 天井部	口径 器高 底径	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	青灰色	
-2	*	B7Gr 8A層	須恵器 壺体部	口径 器高 底径	外面：平行タタキ 内面：青海波紋タタキ	密	良好	青灰色	
-3	*	B7Gr 8B層	須恵器 壺 体部	口径 器高 底径	外面：平行タタキ 内面：青海波紋タタキ	密	良好		
-4	*	B6Gr 8B層	土師器 壺 L1縁部	口径(31.3) 器高 底径	外面：指頭圧痕 内面：ハケメ、指頭圧痕	1mm以下の 砂、石英を 含む	良	外/暗褐色 (一部黒色) 内/橙褐色 断/黒褐色	7C前後?
-5	図版	B6Gr 8B層	土師器 壺 頸部	口径 器高 底径	外面：一部ハケメ 内面：不明	1mm程度の 砂、雲母を 含む	良	外/暗褐色 内/橙褐色 断/黒褐色	

谷2区出土その他遺物観察表

攝図番号	写真図版	出土地点	種別 磁器	法量(cm)	備考
63-8	図版44	C7Gr 37層	烟管 雁首	雁首長 5.2 火皿直径 1.1 ラウ接合部径 1.1 高 1.5	吸口側からみて左側に鋼板の縫目があるもの 油返しの湾曲がなく火皿へ直接続くもの 古泉第5段階(18c後半)

谷部の調査

図版



完掘状況 (1~4Gr)



調査前



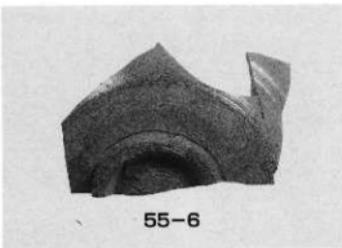
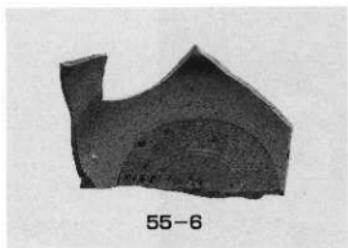
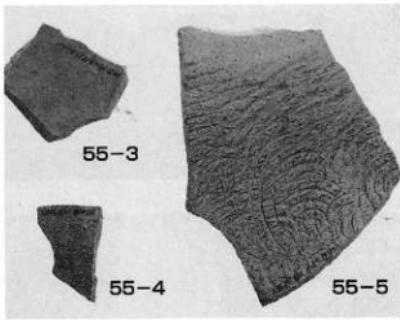
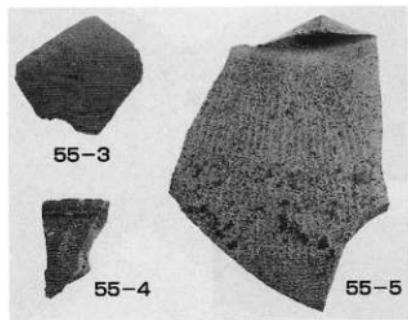
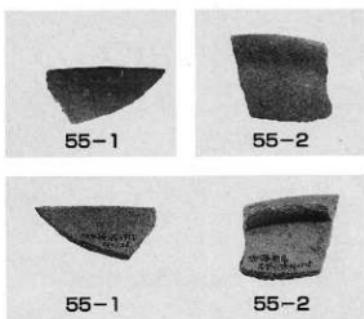
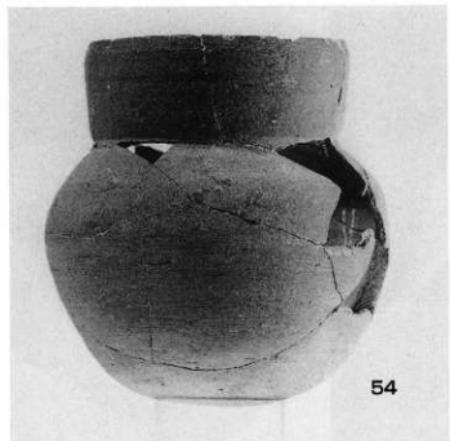
S P ライン土層堆積状況



SK01



SK01周辺
ピット群（東より）



谷1区出土遺物



遺構面完掘狀況



完掘狀況



調査前



3ライン土層堆積状況



8ライン土層堆積状況



SK01



SK02

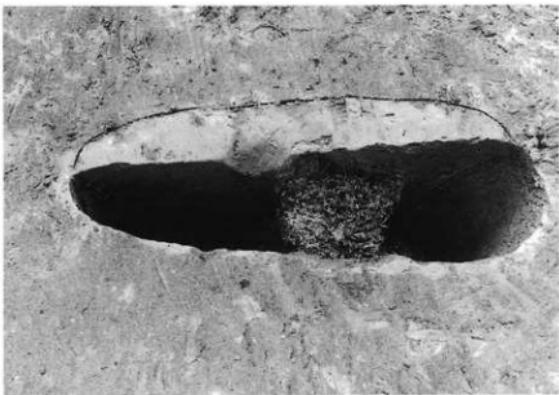


ピット列

SB01

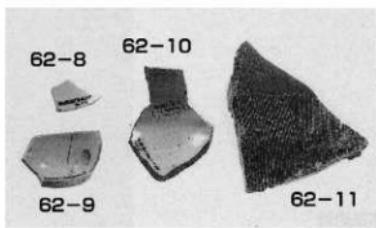
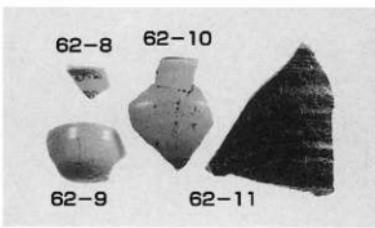
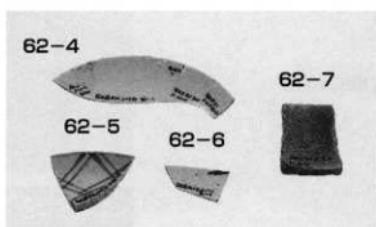
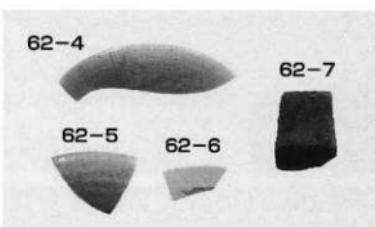
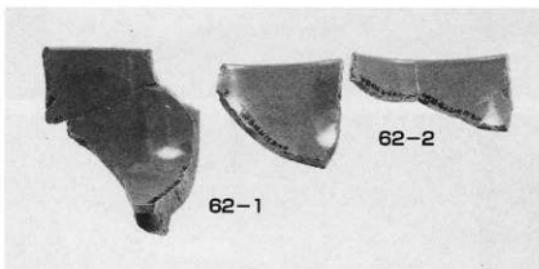
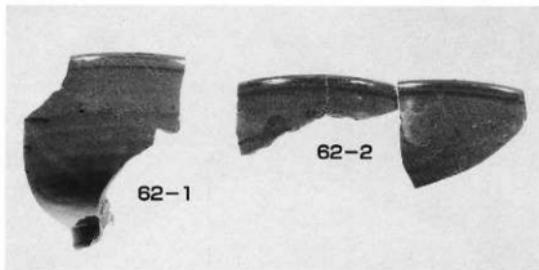


柱根検出状況

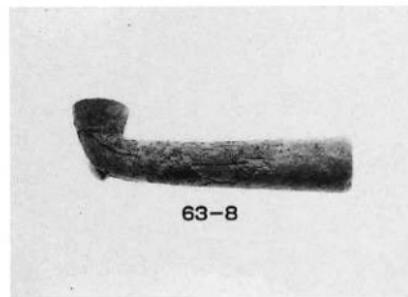
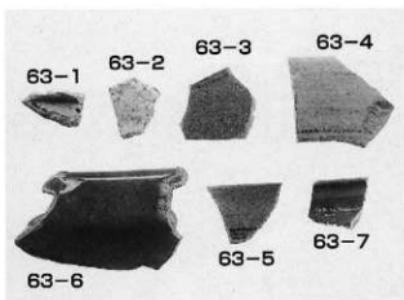
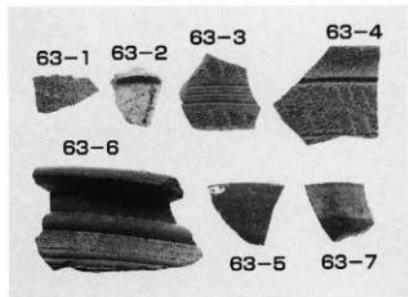


作業風景

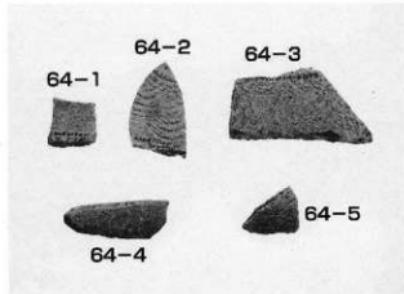
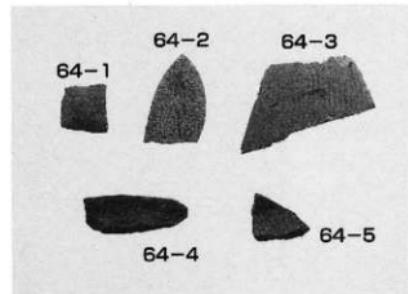




遺構内出土遺物 (1~7 SK01、8 SB01、9~11 ピット)



8層上層出土遺物



8層出土遺物

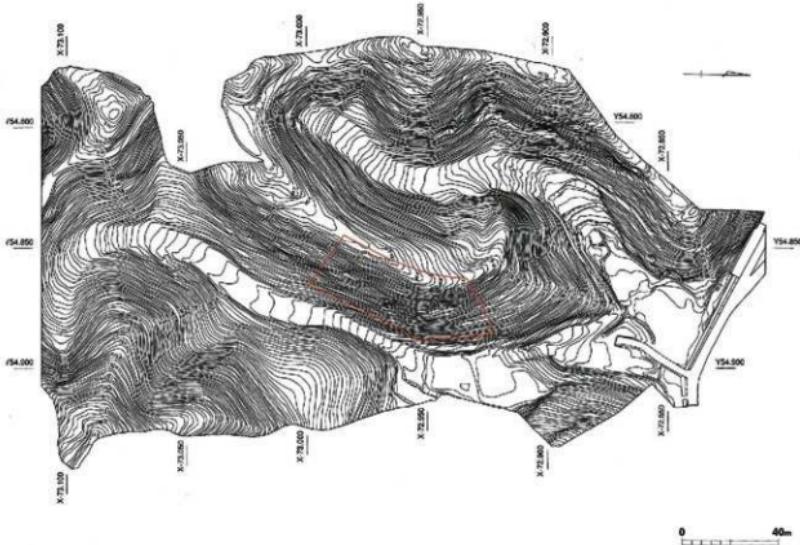
IV. 上塩冶横穴墓群 第18支群

IV. 上塩治横穴墓群第18支群

この横穴墓群は、出雲市上塩治町大井谷の奥に派生した小さな谷に面する丘陵斜面に位置し、この谷の最奥には38支群が、北側の谷には第17支群が存在している。

この横穴墓群は調査前より2基の横穴墓が知られていた。この2基の間はかなり離れており、1号横穴墓の奥にも横穴墓を造墓するのに適する斜面が続いていたため、かなりの数の横穴墓が埋没していることが予想された。

そこで調査の対象をこの支群の位置する斜面すべてとした。始めに、調査区内の岩盤の状況を把握するため、約1m四方の試掘トレンチを設定した。その結果、横穴墓と同レベルには横穴墓が頻繁に造られる凝灰岩が分布していたが、トレンチを多く設定していたにもかかわらず横穴墓は確認できなかつた。そこで、凝灰岩をすべて露出させるため、重機で上面より徐々に掘削した。結局、横穴墓造墓に適する凝灰岩自体は分布するものの、横穴墓は当初より知られていた2穴のみであることを確認し横穴墓の調査に入った。以下、横穴墓ごとに報告する。



第65図 調査前地形測量図

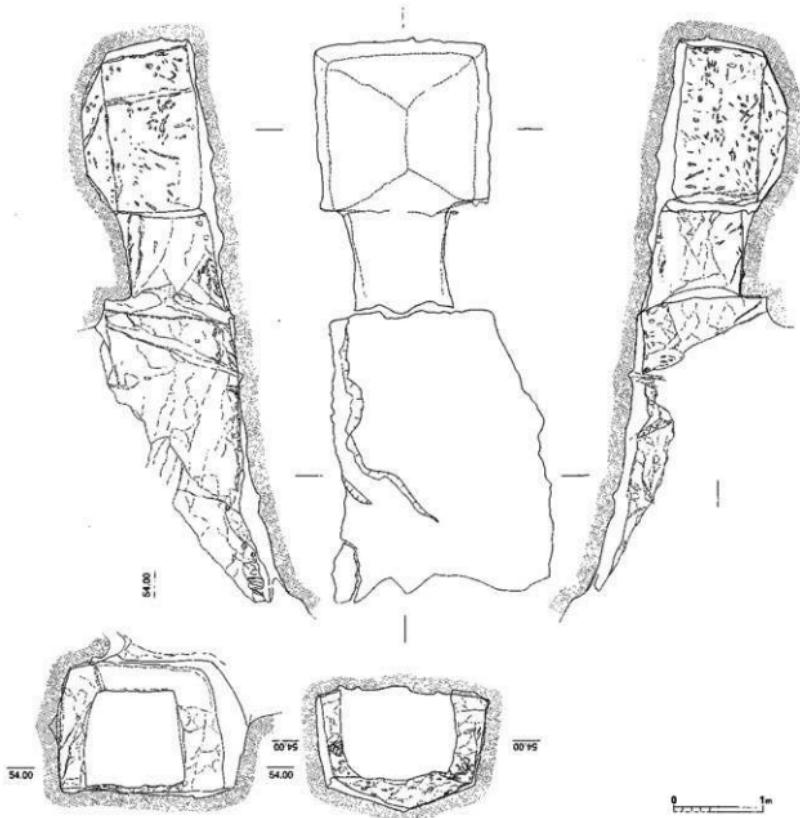
1号横穴墓

しっかりとした造りを持つ横穴墓であり、開口方向はE~36°~Sである。

遺構（第66・67図）

前庭

最大幅2.4m、長さ3.1mを測り、床面には多くの溝状加工痕を残す。壁面は多くを残しており、風化が進んでいる場所もかなり見受けられたが調整をしっかりと施し、平滑に造られているようである。



第66図 1号横穴墓 遺構実測図

床面西側の壁際には明確ではないものの前庭奥より溝が設けられており前庭中程より中央に入っています。この溝は東側にはみられないが、排水用に設けられたものと考えられる。この横穴墓の特徴として、前庭の奥に20cm程だけ天井を持つことが挙げられる。このことからか、以前より複室構造の横穴墓として知られていたようであるが、調査の結果、前庭は羨道より一貫して造られており複室構造ではないことが判明した。

羨道

幅1.0m、長さ1.1m、高さ1.1mであり、床には多くの加工痕を残している。羨門には段が設けられているが、端では明確であるものの中心では曖昧になっている。平面プランはほぼ正方形を呈する。壁面は平滑で加工痕も認められるが、一部では岩盤に含まれた礫のために加工痕を認めるのが困難である。

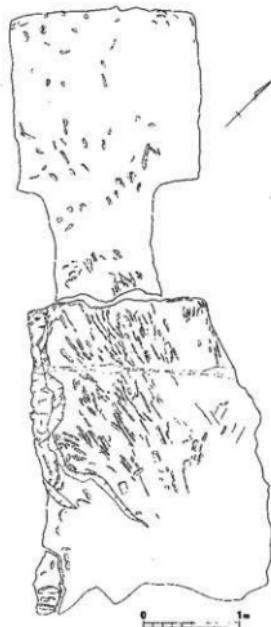
玄室

平面プランは幅2.0m奥行き1.9mのほぼ正方形を呈する。玄室の中軸は前庭・羨道の中軸と比較し若干東偏する。羨門においては、北側の袖の部分が南側と比べて幅広になっており、何らかの理由により、前庭・羨道に対して、玄室を左右対称に造ることができなかつたのであろう。天井形態は妻入り家形を呈しており、床と壁の界線、軒線、棟線は明瞭でしっかりと造りになっている。壁面は基本的に平滑であるが、所々深い加工痕が残されている。

壁面の状態からみると、ある程度の調整まで済ませているようであるので、成形段階での加工痕が深く、調整をし終えても加工痕が残ったものと考えられる。床面はゴツゴツしており、調整は施されていない。床面の東半分は西半分よりも若干高くなっている、段を形成するように加工がみられるため、屍床を造り出そうとした可能性がある。

閉塞状況

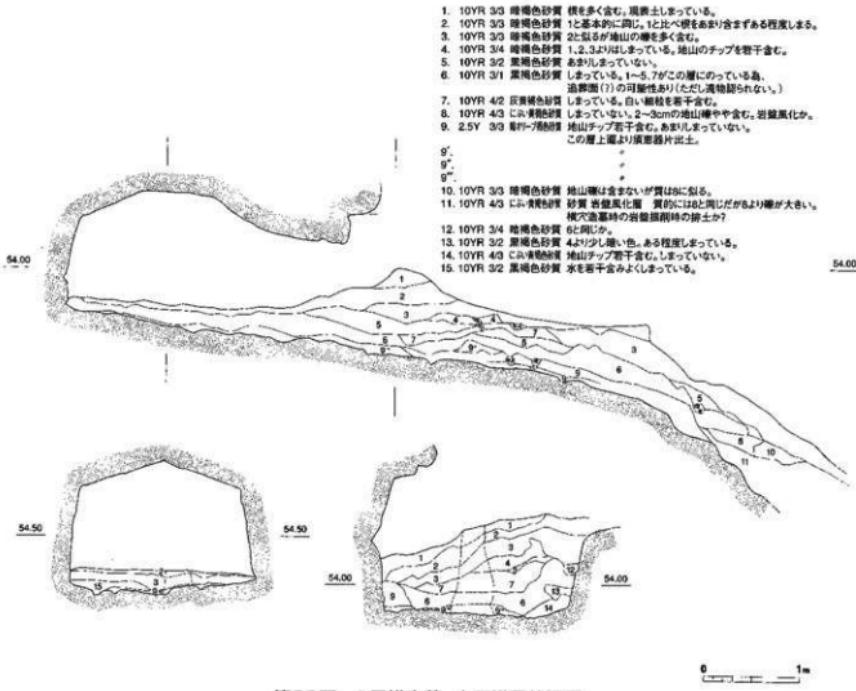
はっきりと閉塞石と断定できるものは検出できていないが、わずかに直径20cm程度の凝灰岩の栗石を若干検出しているため、石を積み上げる閉塞方法である可能性がある。



第67図 1号横穴墓 床面加工痕

土層堆積状況（第68図）

当初より開口していたため、前庭はもとより、羨道・玄室には多くの土が流入していた。縦断セクション及び前庭部横断セクションより、一度掘り返した（盜掘壙？）と考えられるセクションの不整合面が認められた。（6層上面）ただし、この層は玄室奥まで堆積しており、この段階においては床面まで掘削が及ばなかったようである。



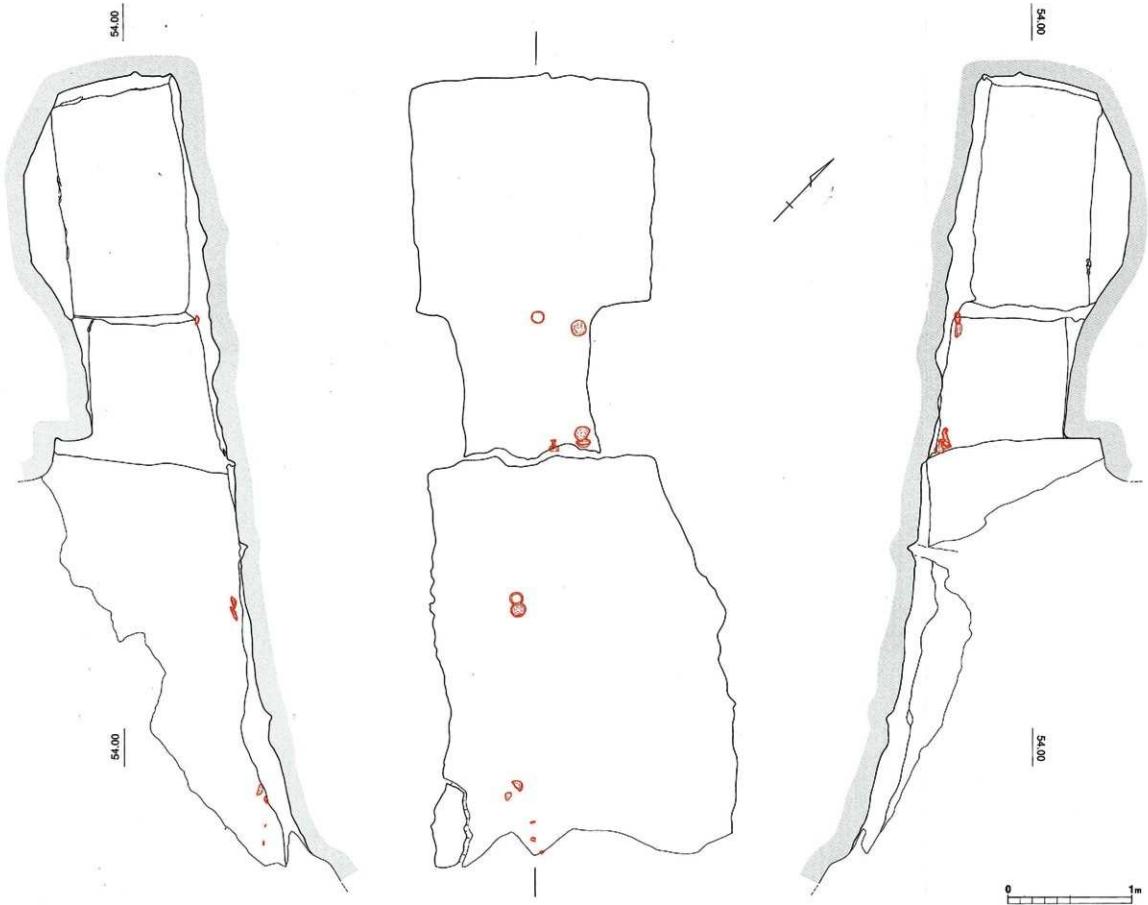
第68図 1号横穴墓 土層堆積状況図

遺物出土状況（第69図）

玄室、羨道、前庭、及び前庭外から須恵器が出土している。

玄室より須恵器坏身1点（1）が出土した。羨道床面より須恵器坏蓋2点（2・3）が完形で出土した。羨門付近より須恵器坏身1点（4）、坏蓋1点（5）、高坏1点（9）が出土し、そのうち坏身1点（4）は直立した状況で出土した。前庭からは坏身1点（6）、坏蓋2点（7・8）が出土している。前庭外よりは須恵器片が数点出土しており、前庭の蓋坏及び玄室内坏身と接合する。

前庭外より出土した須恵器片を除くと、全てが床面直上での出土である。



第69図 1号横穴墓 前庭外遺物出土状況

出土遺物（第70図）

須恵器坏蓋5点・坏身7点・高坏1点が出土している。

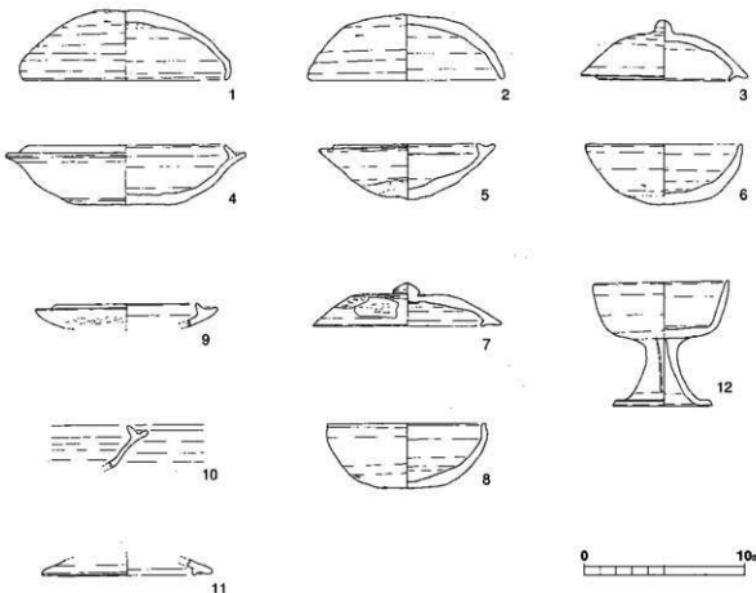
1・2は坏蓋である。1の口縁部は内湾するが、2は広がったままで収めている。4・5・9・11は受部を持つ坏身である。9については坏蓋である可能性もある。

大きさより考えると1・4がセットである可能性も考えられる。

3・7・11はかえりを持つ坏蓋である。3は乳頭状、7は擬宝珠状のつまみを持つ。6・8は受部を持たない坏身であり、3・6及び7・8がセットであると考えられる。

12は長脚無蓋高坏である。坏部は無文であるが、脚部に2方向の切れ込み状の透かしを持つ。

時期的には1・12が出雲5期、3・7が出雲6期の様相を示している。



第70図 1号横穴墓 出土遺物実測図

2号横穴墓

未調整の小型の横穴墓であり、開口方向はN~53°~Eである。

遺構（第71・72図）

前庭

この横穴墓は前庭がほとんど残っていなかった。しかし、人頭大の栗石が積まれており、盜掘を受けた際に閉塞石が残されたものと考えられる。床面は加工痕が多く残されており平滑ではない。

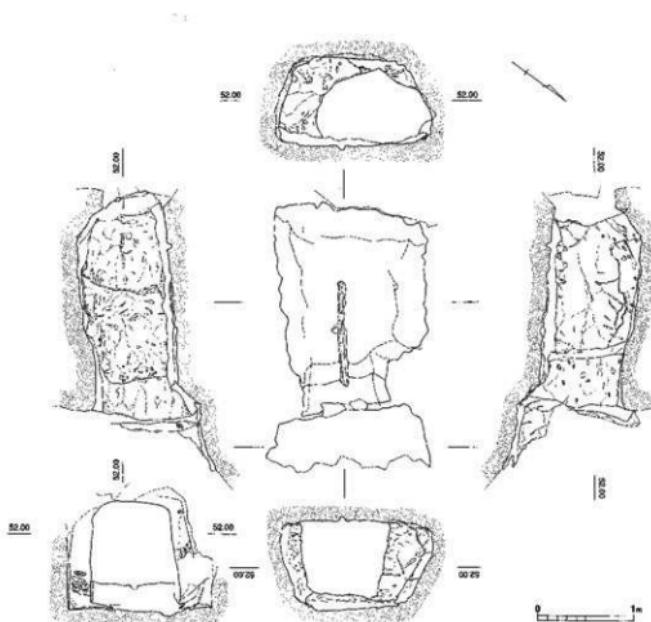
壁面については若干ではあるが羨門付近で残っている。

羨道

幅0.91m、長さ0.4m、高さ0.85mを測る。玄室の中央からは左に寄った位置に付けられている非常に短い羨道である。羨道中程より急に傾斜がついて下がっていき、羨門で段を形成することが特徴的である。

玄室

アーチ形とも平天井形ともいえないあいまいな形態を呈しており、壁、天井とも調整されていない。床面も調整が施されておらずゴツゴツした印象を受けるが、中央には排水のための溝が設けられている。奥は岩盤に入った大きな亀裂のため穴があいているが、最奥の岩盤には加工痕が確認できないこ



第71図 2号横穴墓 遺構実測図

とから、横穴墓完成以前に既に亀裂がはいっており、横穴墓掘削時にこの亀裂にあたったものと思われる。

羨道が玄室の中央よりも左寄りに付けられている関係で袖の大きさが全く違っている。片袖とまではいかないものの左側の袖部は申し訳程度にしか造られていない。

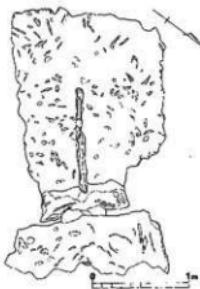
閉塞状況（第75図）

前庭において人頭大の栗石が積まれた状況で残存していた。このことより、石の積み上げによって閉塞していたことが考えられる。

土層堆積状況（第73図）

土層堆積状況によって盜掘痕を確認することはできなかつた。しかし、前庭に残された閉塞石が4層以下でしか認められなかつたことから、少なくとも4層上面までは掘り返されていると考えられる。

玄室で確認された最下層（15層）は玄室だけに堆積しており、玄室中央部分の低い部分を埋めて平らにする意図がみられる上、玄室奥に生じている岩盤の亀裂を埋めていると考えられる。また、この最下層上面からは須恵器蓋環が出土しているため、この層は埋葬時のものであり、未調整の床面を調整するための置き土であった可能性がある。



第72図
2号横穴墓 床面加工痕



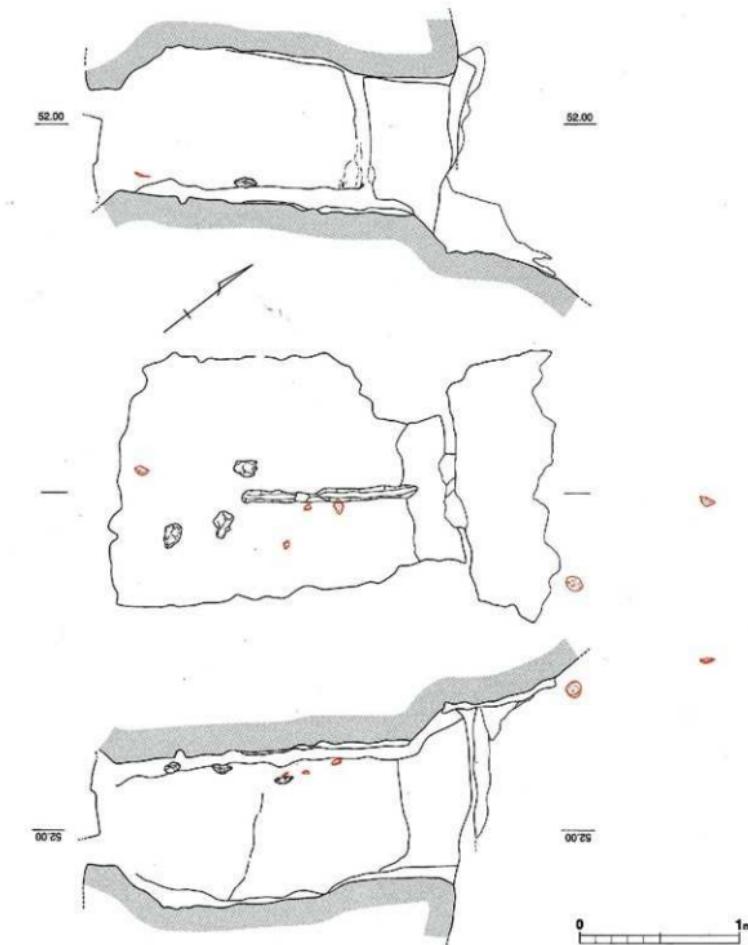
第73図 2号横穴墓 土層堆積状況図

遺物出土状況（第74図）

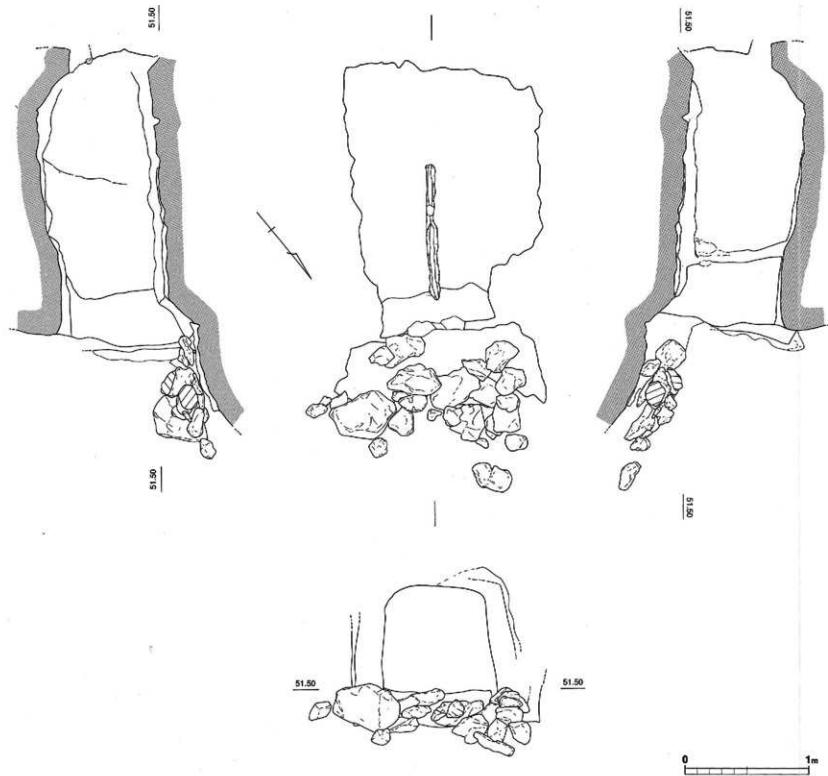
2号穴からは須恵器・小玉が出土した。

須恵器は、前庭外から壊身1点、前庭の閉塞石の付近より壊身1点が出土した。また、玄室内からは壊身1点、壊蓋1点が出土している。玄室内の出土遺物は若干床面からは浮いているものの、最下層（15層）上面よりの出土である。

小玉は1点出土しているが、表土近くの流入土層からの出土である。



第74図 2号横穴墓 遺物出土状況



第75図 2号横穴墓 閉塞石出土状況

出土遺物（第76・77図）

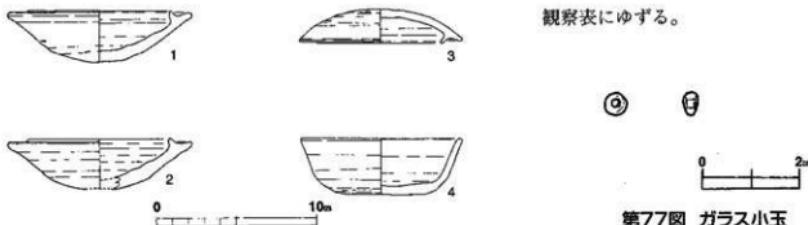
須恵器壺蓋1点・壺身3点及びガラス小玉1点が出土した。

1・2は受部の付く壺身である。いずれも受部の立ち上がりは短い。3はかえりの付く壺蓋である。天井部は丁寧にヘラケズリが施されている。4は受け部の付かない壺身である。底部は丁寧にヘラケズリを施し、口縁部は若干外反している。3・4はセットであると考えられる。

時期についてはいずれも出雲6期の範疇に含めて良いのではないかと思われる。

第77図は直径5mm、厚さ4mmのガラス小玉である。

その他、詳細については遺物観察表にゆずる。



第76図 2号横穴墓 出土遺物実測図

小 結

1号横穴墓について

この横穴墓は上塙治横穴墓群によく見られる規模の横穴墓である。しかし、前庭の長さが約3.1mと他の横穴墓と比べて長いため、大型の横穴墓という印象が強い。また、前庭最奥に天井を持つ横穴墓も数少ない。

1号横穴墓は調査以前より開口していたため、盗掘を受けていることが予想された。現に土層堆積状況より1回の盗掘が想定できた。しかし、遺物出土状況よりみると前庭にまで須恵器が散乱していたため、セクションで認められる以前にも盗掘若しくは追葬の際の遺物搔き出しが行われた可能性もある。どちらにせよ前庭の部分までも再度掘り返された様子がうかがえる。

2号横穴墓について

遺構の状態より考えると未完成の横穴墓と考えられるが、玄室内より完形の須恵器蓋壺が出土するなどいくらかの出土遺物がみられるため、墓として利用されていた可能性が非常に高いと考えられる。ただし、この横穴墓の玄室規模が小さいことから成人を埋葬するにはあまりにも狭く、子供を埋葬したと考えた方が自然である。

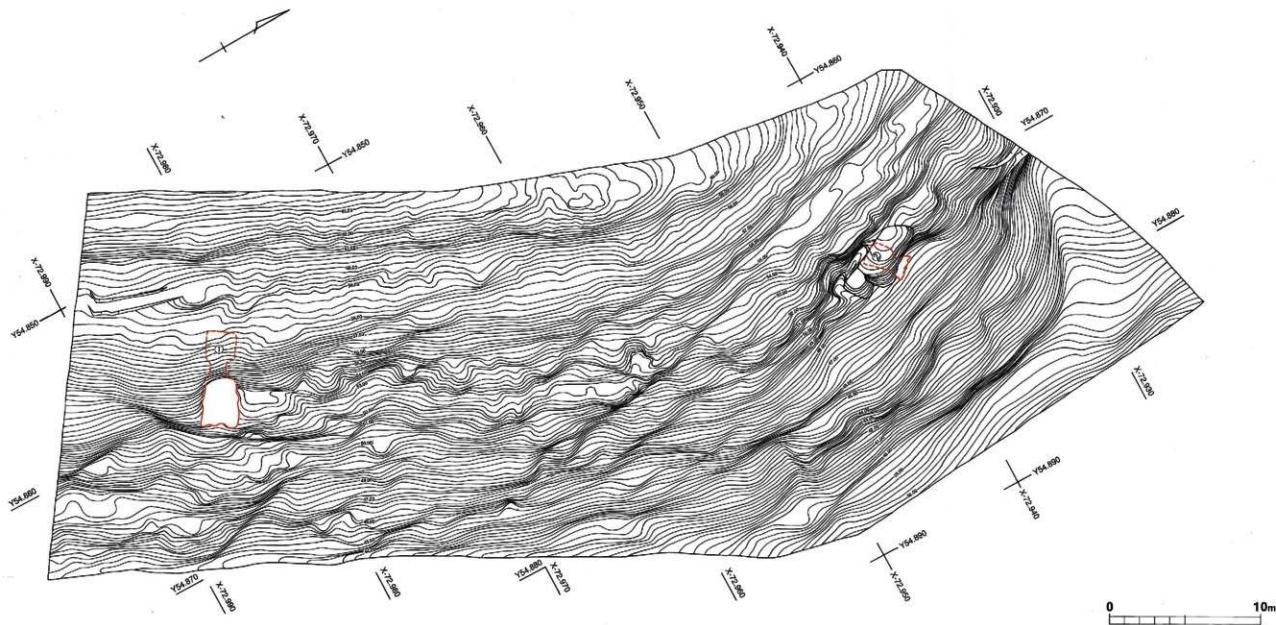
横穴墓の新旧関係について

調査の結果、上塙治横穴墓第18支群は2穴からなる支群であることが判明した。この2基の横穴墓は規模、形態ともに違っている。2号横穴墓の玄室形態だけを見ると、1号横穴墓よりも古い要素を

含んでいるようにみえる。しかし、出土遺物の最も古い時期は、1号横穴墓が出雲5期、2号横穴墓が出雲6B期であり、単純にこれを造墓時期ととらえるならば、1号横穴墓の方が先に造墓されたことが推定できる。

横穴墓の立地について

2号横穴墓は尾根の先端側に位置し、凝灰岩質砂岩の中に狭い範囲で存在する凝灰岩を狙い澄ましたかのように築造している。また、1号横穴墓は2号横穴墓よりも谷奥に存在するが、ここは2号横穴墓の築造された状況とは違い、広い凝灰岩の一角に築造する。この凝灰岩と同様の岩盤には横穴墓がよく築造されるにもかかわらず、18支群においては1号横穴墓の1基のみである。隣接する第17支群9号～14号横穴墓のように限られた凝灰岩のスペースを無駄にしないようにひしめき合って築造されるのとは対照的である。



第79図 第18支群 遺構配図

上塙治横穴墓群第18支群 遺物観察表

擇図 番号	写真 図版	出土地点	種 別	法量(cm)	手法の特徴	胎 土	焼 成	色 調	備 考
70-1	図版55	1号横穴墓 表道	坏蓋 須恵器	口径: 12.5 器高: 4.4	外面: 横ナデ 内面: ナデ	2mm以下の 砂粒を含む	良好	内外面: 灰色	外面に灰を被り、 一部釉化
70-2	タ	1号横穴墓 表道	坏蓋 須恵器	口径: 11.4 器高: 4.1	外面: 横ナデ 内面: ナデ	2mm以下の 砂粒を含む	良好	内面: 灰色 外面: 暗灰色	完形
70-3	タ	1号横穴墓 前庭	坏蓋 須恵器	口径: 10.5 器高: 3.7	外面: ヘラケズリ 横ナデ 内面: ナデ	1mm程度の 砂粒やや含む	良好	内面: 灰色 外面: 暗灰色	外面1/4に灰を被る 乳頭状つまみが付く
70-4	図版56	1号横穴墓 前庭	坏身 須恵器	口径: 12.3 器高: 3.8 底径:	外面: 横ナデ 内面: ナデ	2mmの小石 をわずかに 含む	良好	内外面: 暗灰色	残存 約1/4
70-5	タ	1号横穴墓 表道	坏身 須恵器	口径: 8.9 器高: 3.5	外面: ヘラ切り 横ナデ 内面: ナデ	2mmの小石 をわずかに 含む	良好	外面: 灰色 内面: 暗白色	外面一部に灰を被る 内面に朱?
70-6	タ	1号横穴墓 表道	坏身 須恵器	口径: 9.7 器高: 4.8	外面: 横ナデ 内面: ナデ	2mm以下の 砂粒を含む	良好	内外面: 暗白色	
70-7	図版57	1号横穴墓 前庭	坏蓋 須恵器	口径: 11.8 器高: 2.7	外面: ヘラケズリ 横ナデ 内面: ナデ	1mmの砂粒 をわずかに含む	やや 良好	内外面: 灰白色	綴宝珠状つまみが 付く完形
70-8	タ	1号横穴墓 前庭	坏身 須恵器	口径: 9.9 器高: 4.0	外面: ヘラ切り 横ナデ 内面: ナデ	1mmの砂粒 をわずかに含む	良好	内外面: 灰色	口縁部一部欠損
70-9	タ	1号横穴墓 前庭	坏身 須恵器	口径: (8.8) 残存高: 1.4	外面: ナデ 内面: ナデ	1mm程度の 砂粒やや含む	やや 良好	内外面: 灰白色	残存1/7
70-10	タ	1号横穴墓 前庭	坏身 須恵器	残存高: 2.7	外面: ナデ 内面: ナデ	1mmの砂粒 をわずかに含む	良好	内外面: 灰色	破片
70-11		1号横穴墓	坏蓋 須恵器	口径: (10.7) 残存高: 1.0	外面: ナデ 内面: ナデ	1mmの砂粒 をわずかに含む	やや 良好	内外面: 灰白色	破片
70-12	図版58	1号横穴墓 表道	高坏 須恵器	口径: 8.4 器高: 7.8 脚部径: (6.2)	外面: 横ナデ 内面: ナデ	1mmの砂粒 やや含む	良好	内外面: 灰暗色 脚部内面: 灰色	脚部2方向に 切込状透かし穴 一部灰被る
76-1	タ	2号横穴墓 玄室	坏身 須恵器	口径: 8.8 器高: 3.2	外面: 横ナデ 内面: 横ナデ・ナデ	1mmの砂粒 をわずかに含む	不良	内外面: 灰白色 底部 ヘラ切り	
76-2	タ	2号横穴墓 前庭外	坏身 須恵器	口径: (8.8) 残存高: 3.1	外面: 横ナデ 内面: 横ナデ		良好		残存1/4 反転復元
76-3	図版59	2号横穴墓 玄室	坏蓋 須恵器	口径: 7.7 器高: 2.1	外面: ヘラケズリ 横ナデ 内面: ナデ	1mmの砂粒 をわずかに含む	良好	内外面: 青灰色	天井部にヘラケズリ 残存7/8
76-4	タ	2号横穴墓 前庭外	坏身 須恵器	口径: 14.8 器高: 3.6	外面: 横ナデ 内面: 横ナデ・ナデ	1mmの砂粒 やや含む	良好		完形

擇図 番号	写真 図版	出土地点	種 別	法量(cm)	備 考			
77-	図版59	2号横穴墓 排水	ガラス 小玉	直径: 0.5 厚さ: 0.3	色味は緑色である。			

上塩冶横穴墓群 第18支群

図 版



第18支群 全景 調査前



第18支群 全景 調査後



1号横穴墓 調査前 遠景



1号横穴墓 調査前



1号横穴墓 遠景

前庭 横断土层堆积状况

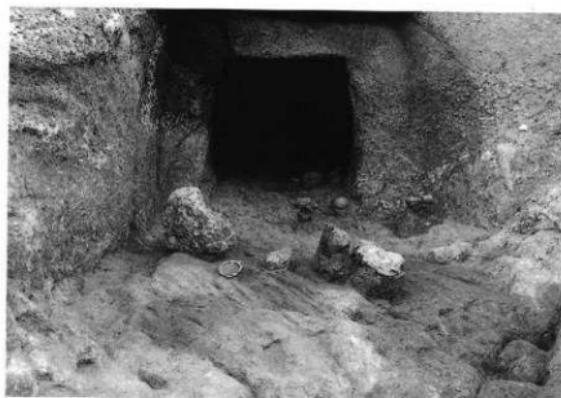


前庭 纵断土层堆积状况



前庭外 纵断土层堆积状况

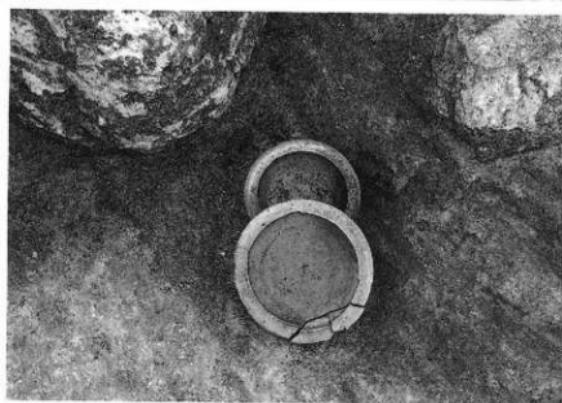




遺物出土狀況



葬道 遺物出土狀況



前庭 遺物出土狀況



完掘状况（正面）



前庭床面加工状况



前庭 排水溝



玄室 奥壁



玄室 左側